

論文の内容の要旨

論文題目 ジャック・デリダと生産の概念

氏名 小森 謙一郎

ジャック・デリダの著作や論文において、「生産」という概念は控え目なままにとどまっている。それは「脱構築」ないし「差延」「余白」「散種」等々のごとく、積極的に語られているわけではない。しかし、デリダ自身はこの概念が「非常に重要だった」と述べており、たとえ主題的に論じたことが一度もなかったとしても、生産という語はたしかに彼の主要なテキストの片隅で無視できない重みをもっている。だとすれば、生産の概念はデリダにとっていかなる意味において「非常に重要だった」のか？ 彼はこの概念にどのように取り組み、どのような思考を展開していたのか？ 三部からなる本稿では、とりわけ六〇-七〇年代のデリダに着目しつつ、問題の所在を検討した。以下、順を追ってその要旨を示す（各部は三つの章に、各章は三つの節に、それぞれ分けられている）。

第一部

まず最初に、本稿のなかで検討される問題の枠組みを説明するとともに（第一章）、その検討のための予備考察を行った（第二章および第三章）。

第一章では、デリダにとって生産の概念がいかなる問題として提起されているかを示した。

(一) 一九六七年に公刊された『グラマトロジーについて』のなかで、デリダは「生産する」

という語の意味について、ごく簡潔な定義をおこなっている。すなわち、生産なるものは「言語の変形のなかに含まれて」おり、「私たちが生産と呼ぶものは必然的にひとつのテキストである」。この定義は十分に明確ではないが、しかし（二）それはデリダにとって一時的なものではない。というのも、約二〇年後の八八年に発表された質疑応答のなかで、彼は当の定義を回顧しつつ、生産が意味するのは「創造性でもなく明示化でもない」と述べているからである。（三）さらにデリダはその翌八九年に行なわれたインタビューのなかでも、上述のごとく生産概念が「非常に重要だった」と回顧している。六〇年代の彼はマルクス主義の生産概念に疑念をもっており、正面から異議を唱えることはできなかつたにせよ、内心では反対していたのだという。そこで彼は自分自身にとって重要だと思われた「予備作業」に着手した。生産概念の「哲学的な系譜」が多くの問題を提起したのである。

以上のことから、次のような仮説を立てることができる。

- 1、デリダにとっても生産の概念は「非常に重要だった」のだが、しかし当時の彼を取り巻いていたマルクス主義の生産概念には納得できなかったこと。
- 2、だからこそ彼は「哲学的な系譜」においてなされた概念規定を考察し、「創造性」や「明示化」とは異なる意味を探求しようとしていたこと。
- 3、そのようにして彼が探求しようとしていた意味とは、「生産とは必然的にひとつのテキストである」という定義と無関係ではないであろうこと。

そしてまず第一部の残りの第二章と第三章において、上記の1を論証した。

第二章においては、先に言及した八九年のインタビューから出発して、（一）六〇年代のデリダが違和感を抱いていたアルチュセールの生産概念がいかなるものであったのかを確認し、（二）その違和感が抱かれた背景を考察するとともに、（三）当時の彼が置かれていた状況を明確にした。

また第三章においては、九三年のマルクス論に着目し、（一）生産概念に関するデリダの思考がどのような方向性をもって展開されることになるのか、（二）そして九〇年代に彼はこの概念についていかなる問題を提示することになるのか、（三）さらにマルクス自身はそもそも生産の概念について何と言っているのか、それぞれ具体的に検討した。

こうした予備考察によって、第一部では生産の概念に対するデリダの取り組みの起点と終点とを押さえた。つまり一方において、マルクス主義的な生産概念とそれに対するデリダの違和感を、他方において彼にとって重要であったその概念に関してデリダ自身が四半世紀後のマルクス論のなかで述べることになる考えを、それぞれあらかじめ確認したのである。

もつとも、本稿がデリダのテクストを直接読解しながら検討するのは、彼がその起点と終点とのあいだで行なっていた「予備作業」にほかならない。つまり、「哲学的な系譜」に関して行なっていた生産概念の検証作業と、デリダ自身による生産概念の練り直しである。この検証作業と練り直しとは、さきほど論証すべき点としてあげた仮説のうち2と3とに相当するのであるが、これらはそれぞれ本稿の第二部と第三部において考察されることになる。

第二部

それゆえ、仮説2を論証しながら考察されるのは、デリダが「哲学的な系譜」に関して行なっていた生産概念の検証作業である。

まず第一章においては、七五年の論文「エコノミーシス」をとりあげた。カントの『判断力批判』を論じたこの論文において、デリダは「ミメーシスとしての生産」というテーマを掲げている。そこでデリダの読解の論点を、以下の三つに分けて整理した。すなわち、(一) カントは自然と芸術とを対立させているが、ひとつの存在論-神学によってその対立を最終的に解消していること。(二) この解消を可能にしているのは生産的構想力であり、『判断力批判』はこれを天才という形象のうちに託していること。そして(三) 最高の天才は詩人であり、カントの言説において天才詩人の言葉は「諸価値の価値」とみなされていること。こうした読解からわかるのは、デリダが構想力の生産性を「創造性」として捉えていたということであり、このことは八八年における回顧と一致する。創造性としての生産性を、デリダはたしかに批判的に論じていたのである。

次に第二章においては、デリダのそうした議論がすでに六八年の論文「堅坑とピラミッド」のうちに見出されることを確認した。彼によれば、生産的構想力の概念はヘーゲルにとっても不可欠であった(一)。しかし、生産的構想力を基盤とする存在論-神学は、ヘーゲルにおいては歴史哲学的な射程をもっており、創造性としての生産性がヘーゲルの体系のなかに登場するのは、ギリシア的段階においてであって、エジプト的段階では決してない(二)。デリダ自身はしかしそうした規定や歴史哲学を批判的に論じており、そのことをここでは七四年の『吊鐘』における一節をもって検証した。その一節はまたマルクス主義的生産概念に対するデリダの異議を暗に含んでいるかもしれず、デリダは創造性としての生産性に反対することで、おそらく唯物論的な生産性からも距離をとっていたのである(三)。

以上の二つの章によって、創造性としての生産性は構想力の概念とともに培われてきた、ということが理解される。デリダは構想力が自発性と受動性の統一であると述べているが、そうした考え方はハイデガーに遡る。そこでデリダがハイデガーに対して保っていた両義的な関係を指摘することから、第三章を開始した(一)。さらに『芸術作品の根源』を論じた七八年のデ

リダの論文「返却＝復元」を取り上げ、そのなかで論じられているフェティッシュ化の問題が生産概念と関係していることを示した（二）。しかし『芸術作品の根源』は、生産性をその伝統的な規定から解放する一方で、古典的な形而上学を復興してもいる。*producere*なる語について独特な解釈を提示しているハイデガーは、批判以前のひとつの贈与に依拠しており、一種の盲信がその言説を先導しているのである。この点において、デリダは「明示化」を目指したハイデガーの言説にも懐疑的であったと言えるだろう（三）。

こうして第二部の全体を通じて、デリダが「哲学的な系譜」を念頭において行なっていたのは、生産性を創造性として捉えるカントやヘーゲルに対する批判的検証であり、さらに生産の概念を贈与の問題へと関係づけたハイデガーに関する批判的分析であったことが理解される。少なくとも六八年から七八年の十年のあいだに、デリダはそうした検証作業に着手していたのである。

第三部

最後に上記の仮説 3 を論証した。問題なのはデリダによってなされた生産概念の練り直しであり、「生産とは必然的にひとつのテクストである」ということの意味である。

第一章においては、『時間を与える』に着目した。七十七七八年の講義に基づくこの著作に関してとくに注目したのは、贈与なるモチーフと生産概念の結びつきである。デリダはボードレールの散文詩「贖金」を読みながら、この作品が文学の「自然化」を行なっていると述べており、以下の問いを提示し答えるべく試みた。（一）デリダはカント的詩人の天才に創造性としての生産性をみていたが、ボードレールのうちに「自然化」という契機を見出すことで、いかなる問題を提起しようとしているのか。（二）その問題が生産の概念と無関係ではありえないのは、デリダがピュシスのピュエインを「根源的な生産性」「贈与的生产」と捉えているからであるが、だとすればボードレールによる「自然化」は、そうした「自然の贈与」からどのように区別されるのか。そして（三）「自然化」なるものがなお「贈与的生产」と関わっているのだとすれば、生産の概念はデリダによっていかに練り直されるのか。

以上の最後の問いに対しては、エクリチュールという契機が見出される。デリダは『時間を与える』のなかで「エクリチュールの贈与」について語っており、すでに六九年にも「エクリチュールによる生産」を問題にしている。それはマラルメを論じた「二重の会」においてであって、この論文はここまで追ってきたデリダの議論を胚胎しているかのようなのである。そこで第二章ではこの論文に着目し、まずその胚胎の様相を確認した（一）。デリダによれば、マラルメのテクストは「形而上学の閉域」を素描しており、かつこれを解体している。とくに「黙劇」なる作品にはいかなるレファレンスもなく、語たちはたえず置換される状態にある。デリダは

このことを「隠喩的生産」と呼んでおり、ここに前述の「生産とは必然的にひとつのテキストである」ということの意味を読みとった。そしてこの「隠喩的生産」が哲学的な生産概念ともマルクス主義的な生産概念とも異なっていることを論証し（二）、さらにこれをデリダによる生産概念の練り直しそのものとして検討した（三）。

第三章においては、デリダによって練り直された生産の概念が、結局いかなる問題を提起するのかを考察した。そこで九〇年のヴァレリー論「他の岬」を取り上げ、以下の三点を論証した。すなわち、（一）デリダは「精神」をめぐるヴァレリーの諸考察を検討しているが、その話は「哲学的な系譜」における生産概念の伝統に属しているだけでなく、マルクスからアルチュセールへと受け継がれる生産概念を中継しているということ。（二）「他の岬」がとくに問題にしているのはヨーロッパ精神であり、デリダはこれを「キャップの形象」として捉えているが、キャップの論理には還元されないエクリチュールこそが、デリダにとって重要であること。（三）キャップなるものはヴァレリーにおいて他者へと開かれ始めているとデリダは論じているが、他者へのそうした開かれこそが、生産概念の練り直しを通じてデリダが思考しようとしていたものであるだろうこと。

そしてデリダの言う「必然的にひとつのテキストである」生産が、「コーラの唯物論」に通じていることを指摘し、本稿全体のまとめとした。デリダにとって生産性は一種の受容性に関係づけられており、これは既存のいかなる生産概念とも異なっているのである。